

身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域課題解決型キャリア教育

生徒自らが学習の成果を生かして社会貢献をし、地域課題に取り組むことで専門の知識と技術を深める伊佐農林高校。社会とつながる学びは生徒に学習意欲能力の向上をもたらしています。

教科の学びを 社会で深める 農業高校のPBL (プロジェクト学習)

第7回 伊佐農林高校 (鹿児島・県立)

取材・文 / 江森真矢子



売と募金箱で集めた寄付額は、必要経費を引いて約17万円に上った。

地域応援団はクラブでも委員会でもない有志のボランティア団体で、クラブ活動や委員会と掛け持ちする生徒も多くいる。現在は「知らせる」ISA 4 to 8、「育てる」食農倶楽部、「助ける」草刈倶楽部、「彩る」デザインクラブの4班での活動のほか、地域を盛り上げるために伊佐市の農産物を使ったピザ作りやPRイベントを行っている(図1)。

結成は2011年、きっかけとなったのも実は震災だった。募金を募り、学校で作っている豚味噌の缶詰「更生之素」を被災地へ送ったのが始まりだ。社会と積極的に関わろうとする生徒たちを見て、相談に乗っていた教員が「もっと伊佐農林の生徒だからこそできる活動をしてはどうか」とアドバイスしたことから地域応援団は生まれた。

正課内外で盛んな プロジェクト学習

伊佐農林高校は農林技術科(A

図1 地域応援団の活動内容

	<p>「知らせる」ISA 4 to 8 伊佐市や伊佐農産物のPR活動 ●オリジナルPRソング「米ふるさと伊佐」制作</p>	<p>伊佐新米祭り ●鹿児島市内で伊佐の農産物のPR活動</p>
	<p>「育てる」食農倶楽部 幼稚園や小学校での食育活動 ●近隣幼稚園、小学校の畑で農業指導</p>	<p>リアル銀の匙プロジェクト ●伊佐の農林産物を使ったピザでPR活動等を行う(オール伊佐農林高校産の素材で作ったピザ作りを目指す)</p>
	<p>「助ける」草刈倶楽部 高齢者のための草刈ボランティア ●作業が困難になった高齢者の依頼に応じて草刈を行う</p>	<p>地域清掃活動</p>
	<p>「彩る」デザインクラブ パソコンを使ったデザイン支援 ●地元企業のダンボール箱制作</p>	<p>地域の祭参加</p>



(写真右・中)授業の一環として鹿児島市内で学校産品の販売を行った生徒が、伊佐市の農産物もここで紹介すればより広く知ってもらえると考えたことからスタートした「伊佐新米祭り」。出品者への説明会も生徒が行う、地域応援団プロデュースのイベントだ。(写真左)イベント出店前の打ち合わせ



科)と生活情報科(L科)3学級ずつの小さな専門高校だ。1年目は各料の基礎を学び、2年目からA科は園芸・林業・大家畜・中小家畜・食品加工班、L科は生活・情報コースに分かれる。今年4月、校長として9年ぶりに同校に赴任した門園史郎先生は「豚の競売に参加する生徒たちの様

子を見て驚きました。大人と対等に渡り合い、先生に言われなくても自分たちで何をすべきかわきまえ、行動している。どこに出しても恥ずかしくない生徒たちです」という。それは日々の学習の中で地域の人と関わる機会が多いのもひとつの要因と教頭の川俣昭寿先生。例えば毎



左から
是枝達人先生(農場長)、源川八重先生(進路指導
主任)、門園史郎先生(校長)、川俣昭寿先生(教頭)



地域応援団、地域の方々と益園洋司先生(中央 オレンジとピンクのつながりを着た生徒の後ろ)

卒業生インタビュー



地域応援団2代目団長
大浦美幸さん
(鹿児島大学 4年生)

—地域応援団に入ったきっかけは？

高齢者ばかりで子どもが少ない地元の現状をどうにかしたいと思っていて、地域のために何かできるのであればと入団しました。

—活動内容はどのように決めた？

これは何かしたい、と思う課題に対して私たちができることを話し合いました。農業の後継者不足に対して、まずは農業を好きになってもらおうと幼稚園で農業体験や食育を行うなどです。私は伊佐をもっと知ってほしいという思いが強かったのでISA4to8でラジオやテレビで広報活動を行ったり、伊佐のPRソングを作りました。

先生が地域の人と私たちをつなげて、アドバイスをくださったので、大きなイベントの開催など高校生だけではできないことができました。また、活動のなかで地域の人に農業の現状や、地域の課題などたくさんのお話を教わりました。地域の人たちがいたからこそその地域応援団です。

—活動を通じた成長は？

授業で学んだ内容がすぐに役立つので、復習にもなり、勉強するモチベーションも高まったと思います。また、何かやりたいと思った時に、それを人に伝えることができる、コミュニケーション力がついたと思います。

高校入学時は漠然と花屋やスポーツインストラクターに憧れていましたが、今は教員を目指しています。幼稚園での食農指導も進路を選んだきっかけのひとつ。私たちが対等に扱い、一生懸命相談に乗ってくださった先生のようになりたい、地域貢献のできる教師になりたいと思っています。どんな場所に所属になっても、どんな職業についたとしても、その地域の人と仲良くなり、今までやってきたことを生かせるようになりたいです。

週2時間、校内の農産物販売所、農林館で順番に販売実習を行う伝統がある。L科生活コースでは授業の中で地域の方に郷土料理を学び、小学生に教えている。また、A科ではグリーンツーリズムについて学び伊佐市の魅力を伝えるツアーを開催するなど正課の中で地域の人と関わる機会が多い。「年に2回行う農林館まつりは、本校の農作物や加工品を求める地元の方々と賑わいますが、駐車場係から全体のマネージメントまで1人1役、必ず役割をもって運営します。課題研究の発表会は学校外の公共施設で行い、成果を地域の方々に発信しています」(川俣先生)。

発信することによって、地域の人から相談がもちかけられることもある。林業班には一台炊きミニかまどのための固形燃料開発の依頼が持ち込まれ、お

教師の働きかけが 生徒の気づきを促す

同校の課題研究の目的は、問題解決能力や自発的、創造的な学習態度及び自己教育力を育成すること。また、地域課題の解決を図る活動を通して教科で学ぶ知識と技術を身にするものとする。地域応援団の生徒は誰かのために学んだことを生かしたいという思いで活動しているが、教員から見れば人生を変える可能性

のあるPBL。課題研究や実習、授業の時と同じように、生徒の主体性が発揮されるよう支援しつつ、時に厳しく導いている。

生徒曰く顧問の益園洋司先生は「厳しいけど優しい。自分たちのことをすごく考えてくれる先生」だという。地域からの依頼によるボランティアや自分たちでプロデュースするイベントなど、月に3、4回校外で活動をし、月の半分以上が稼働日になることもあるなど生徒も教員も多忙だ。そんななかでも、生徒が自分たちで動けるように事前確認をし、活動中に気になる生徒がいれば都度、個人的に話をしている。もちろん事後のふりかえりも必ず行うなど、気づきを促す働きかけを欠かさない。

「イベントもボランティアも、準備を含めてすべてが学びの機会ですから」と益園先生。地域の人々と深くつながり、生徒が活躍できそうなネタがあれば明に暗に提示するなど、活動を裏で仕掛けている存在でもある。地域応援団の活動にはいつのまにか、地元の新聞記者やプロバスケットチーム、地域の市民団体、いさばたなど、たくさんの方々が「応援団の応援団」が集まるようになった。

School Data

1914年創立/農林技術科、生活情報科/生徒数181人(男子85人、女子96人)/進路状況(2015年度)
大学・短大4人、専門学校・職業訓練校19人、就職25人